RittorMusic
An impress Group Company

各　　位

2023 年 5 月 8 日
株式会社リットーミュージック

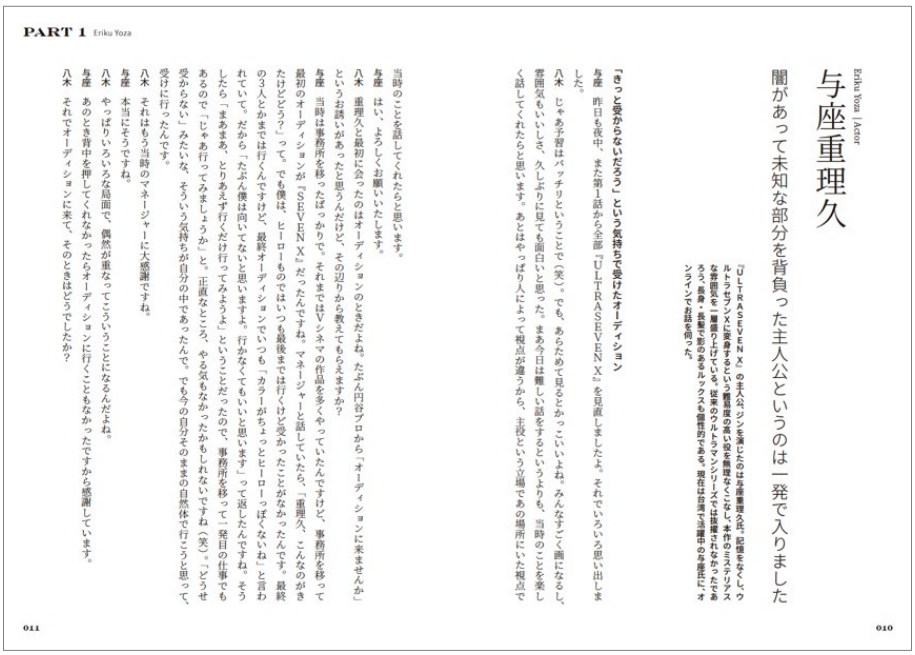
傑作『ウルトラセブン』のマルチバース、可能性の未来としての『ULTRASEVEN X』
その舞台裏を明かす書籍『ULTRASEVEN X 15 年目の証言録』が 5 月 20 日に発売に

インプレスグループで音楽関連のメディア事業を手掛ける株式会社リットーミュージック（本社：東京都千代田区、代表取締役社長：松本大輔）内で文芸・カルチャー関連を扱う出版レーベル立東舎は、『ULTRASEVEN X 15 年目の証言録』（八木毅 編）を、2023 年 5 月 20 日に発売します。

『ウルトラセブン』放映 40 周年を記念して制作された『ULTRASEVEN X』はメイン監督とシリーズ構成を八木毅氏が務め、SF 的なテイストを追求した「大人な」作風が人気です。本書はそんな『SEVEN X』の 15 周年を記念して、八木監督が当時のキャスト・スタッフ総勢 27 名と対話を敢行。現場を知る者同士ならではの胸襟を開いた本音トークが、『SEVEN X』の魅力、現在性

を明らかにしていきます。また美術デザイナー・内田哲也氏のデザイン画をはじめ、現場スナップなどのビジュアル要素も多数掲載し、目でも楽しめる内容となっています。

「証言録」シリーズで定評のある八木監督の最新作、ぜひご注目ください。



Eriku Yoza | Actor

与座重理久

闇があって未知な部分を背負った主人公というのは一発で入りました

『ULTRASEVEN X』の主人公・ジンを演じたのは与座重理久氏。記憶をなくし、ウルトラアイを駆使するいわゆる従来の八木作品のミステリアスな主役とは一線を画した、実直で熱血タイプのキャラクターである。現在は台湾で活躍中の与座氏に、オンラインでお話を伺った。

「きっと受からないだろう」という気持ちで受けたオーディション

与座　昨日も夜中、また第1話から全部『ULTRASEVEN X』を見直しましたよ。それでいろいろ思い出しました。

八木　じゃあ手智はバッチリということで（笑）。でも、あらためて見るとかっこいいよね。みんなすごく画になるし、雰囲気もいいしさ、久しぶりに見ても面白いと思った。まあ今日は楽しい話をするというよりも、当時のことを楽しく話してくれたらと思います。あとはやっぱり人によって視点が違うから、主役という立場であの場所にいた視点で当時のことを話してくれたらと思います。

与座　はい、よろしくお願いいたします。

八木　重理久と最初に会ったのはオーディションのときだよね。たぶん円谷プロから「オーディションに来ませんか」というお誘いがあったと思うんだけど、その辺りから教えてもらえますか？

与座　当時は事務所を移ったばっかりで。それまではVシネマの作品を多くやっていたんですけど、事務所を移って最初のオーディションが『SEVEN X』だったんですね。マネージャーと話していたら、「重理久、こんなのがきたけどどう？」って。でも僕は、ヒーローものではいつも最後までは行くけど受かったことがなかったんです。最終の3人とかまではくんですけど、最終オーディションでいつも「カラーがちょっとヒーローっぽくないね」と言われていて。だから「たぶん僕は向いてないと思いますよ。行かなくてもいいと思います」って返したんですね。そうしたら「まあまあ、とりあえず行くだけ行ってみようよ」ということだったので、事務所を移って一発目の仕事でもあるので「じゃあ行ってみましょうか」と。正直なところ、やる気もなかったかもしれないですね（笑）。「どうせ受からない」みたいな、そういう気持ちが自分の中であったんで。でも今の自分そのままの自然体で行こうと思って、受けに行ったんです。

八木　それはもう当時のマネージャーに大感謝ですね。

与座　本当にそうですね。

八木　やっぱりいろいろな局面で、偶然が重なってこういうことになるんだよね。

与座　あのとき背中を押してくれなかったらオーディションに行くこともなかったですから感謝しています。

八木　それでオーディションに来て、そのときはどうでしたか？

ULTRASEVEN X 全話解説　八木毅

第1話「DREAM」

『ULTRASEVEN X』第1話の放送は2007年10月15日のAM2:30分、深夜です。最初に漆黒の空間に「ULTRASEVEN X」という文字が静かに浮かび上がります。円谷CGチームの斬新な映像と青藤雨弘さんの深みある音が暗く妖しい謎の世界へと誘うようですね。いつもの華やかなオープニングタイトルとは『SEVEN X』のタイトルはなにか違う。そして始まる本編はもっと違います。海が上にあって下に空が開ける上下が逆の世界。自然の摂理を超えた異世界。これは並行世界の表現ですけれど、この段階ではなにも分かりません。映像の素材はオーストラリアで撮影された円谷プロの空撮ライブラリーです。より色彩を強調して、さらに効果をかけて先鋭的な異空間的なイメージにしました。

水の中に墨か男が沈んでいます。これは『SEVEN X』企画立ち上げ時に最初に浮かんだイメージ。水は並行世界の象徴。この段階では男が誰であるか分かりませんが、もちろん彼がこの世界を救うことになる男、ジン（与座重理久）です。ところでこの静寂の中の深淵なイメージカットですが、撮影は普通です。東宝ビルトのグリーンバックの前でジンをワイヤーで吊り上げ、ジェットもファンで風を送りながら、下には落下安全対策の厚マットを用意して、スタッフ総出の大仕掛けで撮影しました。ジェットファンが回りますから現場は爆音なので監督の私も「よーい！　はい!!」と大声を張り上げる。撮影現場は全く静寂でも深閑でもなく一工夫騒がです。出来上がった映像の雰囲気とかに関係なく現場は大勢のスタッフが集まって大騒ぎで撮影しています。ああだこうだと言いながら、わいわいがやがや、そしてあの雰囲気のある深淵な映像が出来上がるのです。こんなところが撮影の楽しいところです。ムービーマジックだと思いますね。

ジンが見る幻想の「白い部屋」にたたずむ「謎の女」。エレア。加賀美早紀さんです。ジンとエレアはこのシーンをミステリアスに、そして神々しく厳粛に演じてくれました。このカットも『SEVEN X』の最初に生まれたイメージです。「白い部屋」は東宝ビルトにセットを建て撮影しました。デザイナー内田哲也さんの洗練された美術と佐藤子輪さんの光の効果、美しいです。フォグメーカーでフォグを焚き込み大変な状況で撮影しましたが最高の仕上がりになりました。

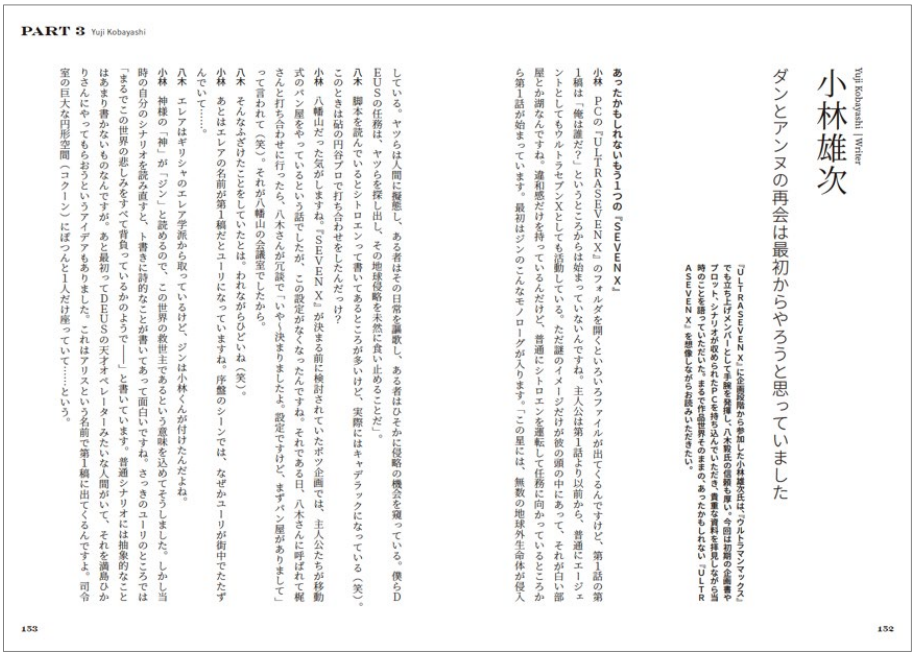
そして、影が妖しく蠢き、水を通過して、どこかの妖しい都市へと辿り着きます。これも物語の鍵で並行世界を象徴するシーンです。CGが素晴らしいです。ここまでイメージの抽象的な映像は終了し、そして本編へ。

ジンがどこかの部屋で目覚めます。彼がカーテンを開けるとそこは深夜のどこかの都市。雨が降り、巨大モニターが空中を浮遊しています。ジョージ・オーウェルの小説「1984」の世界のようですね。「ビッグブラザーがあなたを見ている」というあの「テレスクリーン」に囲まれたディストピア。『SEVEN X』は「1984」の並行世界かもしれません、まんな研鑽の未来の姿をCG表現によって『SEVEN X』では描いてみました。

エレアからウルトラアイを託されジンがビルから飛び降り脱出します。とても美しい場面。ジンはグリーンバック撮影で合成しています。CGチームも素晴らしいですし現場で撮影したスタッフも素晴らしい。そして、ここでは空中浮遊モニター以外にも巨大スクリーンに映るコマーシャル映像やプロパガンダ映像にも注目してください。円谷CGチームがそれぞれの映像を作って世界をまるっと深淵に表現しています。この一連の流れではずっと雨が降っています。『SEVEN X』は「都会」「夜」「雨」の中での世界であると考えています。ジンの部屋、広い部屋の中をジンの動きに高橋君にカメラがついて廻り手持ち長回しで撮影してみたら、いろいろと実験しています。

続いてクラブ「ダルフィ」です。エージェント・ケイ、脇崎智史（トム）がここで登場します。ジンとケイのバディの始まり。最高の2人です。アンダーカバーのエスも素性を隠して登場。エレアもいるので『SEVEN X』の主要メンバーが揃いました。このクラブは六本木のクラブ「コア」です。今はもうありませんがダークな雰囲気が素敵な空間でした。そして、女優のシェリー・スウェニーさんや作家のノーマン・

「白い部屋」の撮影準備中のスタッフたち。モニター横に立つのが監督の八木毅。成瀬巳喜男の演風機などが見える。第1話「DERAM」、東宝ビルトS状



PART 3 Yuji Kobayashi

Yuji Kobayashi | Writer

小林雄次

ダンとアンヌの再会は最初からやろうと思っていました

『ULTRASEVEN X』に企画段階から参加した小林雄次氏は、『ウルトラマンマックス』でもヒットメーカーとして活躍。八木さんがいただき、貴重な資料を拝見しながら当時のことを語っていただいた。まるで作品世界そのままの、あったかもしれない『ULTRASEVEN X』を想像しながらお読みいただきたい。

あったかもしれないもう1つの『SEVEN X』

小林　PCの『ULTRASEVEN X』のフォルダを開くといろいろファイルが出てくるんですけど、第1話の第1稿は「俺は誰だ？」というところからは始まっていないんですね。主人公は第1話より以前から、普通にエージェントとしてもウルトラセブンXとしても活動している。ただ謎のイメージだけが彼の頭の中にあって、それが白い部屋とか湖なんですね。違和感だけを持っているんだけど、普通にシトロエンを運転して任務に向かっているところから第1話が始まっています。最初はジンのこんなモノローグが入ります。「この星には、無数の地球外生命体が侵入している。ヤツらは人間に擬態し、ある者はその日常を謳歌し、ある者はひそかに侵略の機会を窺っている。僕らDEUSの任務は、ヤツらを探し出し、その地球侵略を未然に食い止めることだ」。

八木　脚本を読んでいるとシトロエンって書いてあるところが多いけど、実際にはキャデラックになっている（笑）。このときは砧の円谷プロで打ち合わせをしたんだっけ？

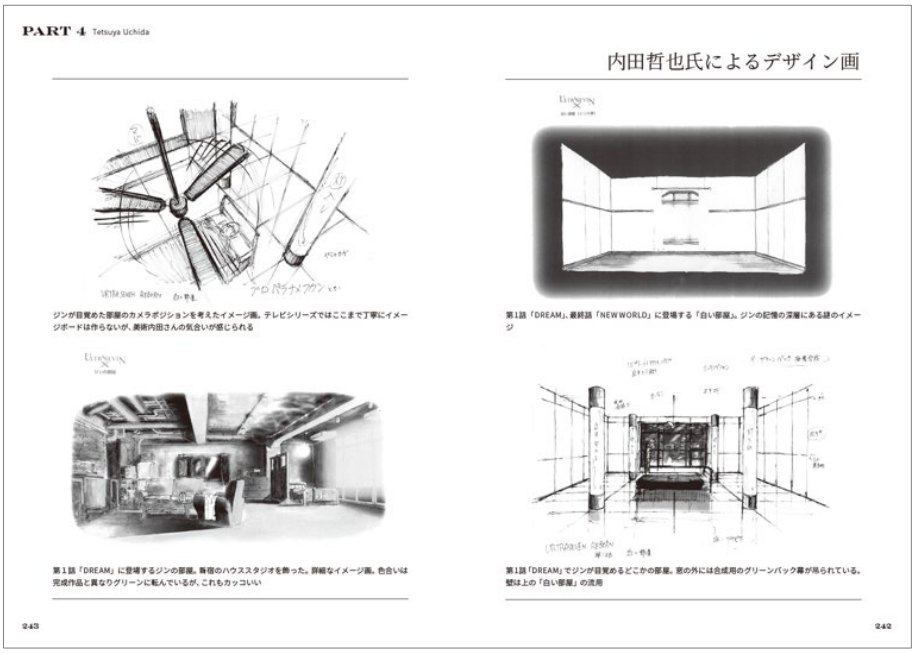
小林　八幡山だった気がしますね。『SEVEN X』が決まる前に検討されていたボツ企画では、主人公たちが移動式のパン屋をやっているという話でしたが、この設定がなくなったんですね。それである日、八木さんに呼ばれて梶さんと打ち合わせに行ったら、八木さんが冗談で「いや、決まりましたよ。設定ですけど、まずパン屋がありまして」って言われて（笑）。それが八幡山の会議室でしたから。

八木　そんなふざけたことをしていたとは。われながらひどいね（笑）。

小林　あとはエレアの名前が第1稿だとユーリになっていますね。序盤のシーンでは、なぜかユーリが街中でただずんでいて……。

八木　エレアはギリシャのエレア学派から取っているけど、ジンは小林くんが付けたんだよね。

小林　神様の「神」が「ジン」と読めるので、この世界の救世主であるという意味を込めてそうしました。しかし当時の自分のシナリオを読み直すと、ト書きに詩的なことが書いてあって面白いですね。さっきのユーリのところでは「まるでこの世界の悲しみをすべて背負っているかのようで――」と書いています。普通シナリオには抽象的なことはあまり書かないものなんですが。あと最初ってDEUSの天才オペレーターみたいな人間がいて、それを満島ひかりさんにやってもらおうというアイデアもありました。これはアリスという名前で第1稿に出てくるんですよ。司令室の巨大な円形空間（コクーン）にぽつんと1人だけ座っていて……という。



PART 4 Tetsuya Uchida

内田哲也氏によるデザイン画

ジンが目覚めた部屋のカメラポジションを考えたイメージ画。テレビシリーズではここまで丁寧にイメージボードは作らないが、美術内田さんの気合いが感じられる

第1話「DREAM」、最終話「NEW WORLD」に登場する「白い部屋」。ジンの記憶の深層にある謎のイメージ

第1話「DREAM」で目覚めるジンの部屋。毎回のハウススタジオを飾った。詳細なイメージ画。色合いは完成作品と異なりグリーンに転んでいるが、これもカッコいい

第1話「DREAM」でジンが目覚めるどこかの部屋。窓の外には合成用のグリーンバック幕が吊られている。壁は上の「白い部屋」の流用

■書誌情報

書名：ULTRASEVEN X 15 年目の証言録

著者：八木毅

定価：2,970 円（本体 2,700 円＋税 10%）

発売日：2023 年 5 月 20 日

発行：立東舎／発売：リットーミュージック

商品情報ページ　http://rittorsha.jp/items/23317404.html

CONTENTS

PART1　キャスト編
与座重理久　闇があって未知な部分を背負った主人公というのは一発で入りました
加賀美早紀　素直な気持ちで、台本通りに操られようみたいな感じで
脇崎智史　僕の今のアクションは『SEVEN X』が原点です
伴アンリ　この作品に出られたことは私の人生にとっては「光栄」です

PART2　監督編
八木毅　あらためて見返してみたけど、やっぱりとても冒険しているね
鈴木健二　撮っているときはやりたいことを全部できた
梶研吾　一撃必殺は、セブンXの強さをとにかく強調したいという意図から
小中和哉＋長谷川圭一　やろうとしていてできなかったことを積極的に入れていった

PART3　脚本家編
小林雄次　ダンとアンヌの再会は最初からやろうと思っていました
太田愛　『SEVEN X』を見ないと人生の損ですよ
福田卓郎　なぜかまた名刺を出す宇宙人が出てきてしまった（笑）
金子二郎　『SEVEN X』では「自分らしさ」を出せました
林壮太郎　他者との共存みたいなテーマは僕の中にもずっとあるみたいです

PART4　スタッフ・アクター編
表有希子　若手は若手で頑張っていたけど、ベテラン勢のフォローもあった
内田哲也　曲がりなりにも独特の世界観は作れたという自負はあるかな
齊藤高広　そのときの感覚でいろいろな足し算・引き算の繰り返しだった
島貫育子＋高橋義仁＋佐藤才輔　スクリプターと撮照が明かす現場の日々
小池達朗＋新上博巳　スーツアクターの実力がそのヒーローの実力であってはいけない
早川哲司＋上田和彦＋小嶋律史＋島田友晴　歴史ある円谷CGチームの経験を生かした集大成

PART5　ウルトラセブン編
ひし美ゆり子　2人が白い服を着て笑い合っているあの一瞬はハッピーなのよね
森次晃嗣　本家本元のダンとアンヌが最後に出て画面的にも締めているのかな

COLUMN　全話解説

PROFILE
八木毅（やぎ・たけし）
早稲田大学シネマ研究会で映画を研究し、卒業後に円谷プロダクションに入社。高野宏一特技監督、満田かずほ（＝のぎへんに斉）監督に師事し、監督、特技監督、プロデューサーとなる。代表作に『ウルトラマンマックス』『ULTRASEVEN X』『大決戦！超ウルトラ8兄弟』『ウルトラマンガイア』『ウルトラQ dark fantasy』『都市伝説セピア』『SD ガンダムフォース』など。2007年に独立して現在はフリー。近年では北米のnaroプロジェクトで脚本・監督として新

作『AKARI』を製作し、また naro 特撮講座を準備するなど海外でも複数のプロジェクトが進行中である。著書に『ウルトラマンマックス 15 年目の証言録』『ウルトラマンティガ 25 年目の証言録』『ウルトラマンダイナ 25 年目の証言録』『特撮黄金時代 円谷英二を継ぐもの』（編）がある。

【立東舎】http://rittorsha.jp/
立東舎は文芸、マンガほか、さまざまな分野のポップカルチャーを紹介する出版活動を展開中。「乙女の本棚」などの好評シリーズのほか、手塚治虫、谷ゆき子らの幻のマンガの復刻などで感度の高い読者の話題を集めている出版ブランドです。

【株式会社リットーミュージック】https://www.rittor-music.co.jp/
『ギター・マガジン』『サウンド＆レコーディング・マガジン』等の楽器演奏や音楽制作を行うプレイヤー＆クリエイター向け専門雑誌、楽器教則本等の出版に加え、電子出版、映像・音源の配信等、音楽関連のメディア＆コンテンツ事業を展開しています。新しく誕生した多目的スペース「御茶ノ水 RITTOR BASE」の運営のほか、国内最大級の楽器マーケットプレイス『デジマート』やエンタメ情報サイト『耳マン』、T シャツのオンデマンド販売サイト『T-OD』等の Web サービスも人気です。

【インプレスグループ】https://www.impressholdings.com/
株式会社インプレスホールディングス（本社：東京都千代田区、代表取締役：松本大輔、証券コード：東証スタンダード市場 9479）を持株会社とするメディアグループ。「IT」「音楽」「デザイン」「山岳・自然」「航空・鉄道」「モバイルサービス」「学術・理工学」を主要テーマに専門性の高いメディア&サービスおよびソリューション事業を展開しています。さらに、コンテンツビジネスのプラットフォーム開発・運営も手がけています。

以上

【本件に関するお問合せ先】
株式会社リットーミュージック　広報担当
E-mail: pr@rittor-music.co.jp